

児童期の自己理解の発達

- 20 答法とインタビュー調査の分析を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
寺町 美紀

本研究では、児童期における自己理解の発達の变化的変化を、子どもの視点から詳細に検討した。そのために、小学校児童のみを対象とし、1) 研究1では、子どもの自己理解を抽出し、自己をどのような観点から描出するのかについて、従来までのカテゴリーを改善し、その上で学年差を検討し、児童期の自己の捉え方を量的側面から総合的に捉えること、2) 研究1で考察された自己理解構造を参考に推察し、質的側面から自己理解の構造を具体的に検討すること、の2点を目的とし、児童期の自己理解の発達を明らかにすることを試みた。

研究1では、小学校2年生(27名)、4年生(36名)、6年生(26名)、計89名を対象に20答法を実施し、その描出を2種類の異なる視点から分析した。また、研究2では、小学校2年生(5名)、4年生(5名)、6年生(5名)、計15名を対象にインタビュー調査を実施し、その描出を研究1の考察を参考にしながら、自己理解の背景にある意味を詳細に描出した。

その結果、各学年の自己理解発達の特徴が明らかになった。まず第一に、学年が上がるに従って、生活に密着した人や物、具体的出来事を媒介として捉えた自己から、生活に密着した人や物、具体的出来事を自分自身で価値付けし、内面から自己を捉えるようになるという傾向が明らかになった。そして、第二に、児童期の自己理解構造には、中学年頃を境に、複雑かつ重要な質的变化が存在していることが示された。中学年は、社会的に発達していく重要な時期であり、具体的な媒体の中から自分の価値観で自己を捉える選択肢が増加することにより、自己像を作り直すために、様々な矛盾や葛藤を経験するのではないかと考察された。三点目に、学年が上がるに従って、肯定的に自己を捉えにくくなる傾向があるということが明らかになった。自分の直接経験にだけ根ざした自己像に加え、他者の視点を把握することが可能になることによって、相互協力的自己認識(佐久間, 2000)が生じたり、自分自身や自分の行動に対して、他人がどう思っているか、どう見ているかに気づくことで自分のしたことに当惑を示すようになった結果、自己に対する不満や批判が生じたのではないかと推察された。

以上のように、大きく3点が明らかになったが、共通して言えることは、それぞれの学年ごとに特徴的な自己の捉え方があり、矛盾や葛藤を抱えながらも子どもたち一人一人が自分の発達段階に応じた自己概念を発達させて生きていたということであった。また、研究1・2から、子どもの自己理解の発達には、社会性の発達が重要であることも考察された。初等教育の中で子ども自身の力や個性を伸ばそうと試みるならば、まずは子どもの視点に立ち、どのように自己を捉えているのか、その社会的背景や意味を知り、児童期の自己理解構造を念頭に置きながら、教育実践を行っていく必要があると示唆された。